

剣聖がオラリオに降り立つのは間違っているだろうか

名無しの葦名衆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

葦名の国にて隻狼に敗れた一心は神が降り立つ地「オラリオ」で目を覚ます

初めて見る己とは異なる種族、モンスター、神。そして強き冒険者達

これ程一心を滾らせる物はないだろう

これは新たな【剣聖の物語】である

*誤字、脱字、変な言葉遣いなど気を付けていますがあるかもしれません

*限りなく原作キャラはキャラ崩壊しないように頑張りますが技量の問題で崩壊するかもしれません

*原作とは異なる展開になる可能性があります

目次

プロローグ	1
一話 「剣聖は神々が降り立つ地に目覚める」	5
二話 「剣聖、炉の女神と出会う」	7
三話 「剣聖、恩恵を授かる」	13
四話 「剣聖、迷宮に挑む」	27
五話 「ロキ・ファミリアは剣聖と出会う」	38

プロローグ

——葦名一心——

一代にして国盗りを果たし、その凄まじい強さから剣聖と呼ばれた内府にすら恐れられた男。

しかし老年には病に伏せ、葦名存続の危機の中自らも戦に出ようと刀を持ったまま息絶えた。

のだが、孫の弦一郎による竜胤の血と自身の肉体を生贄にし全盛期と不死の肉体を持って黄泉還る。

全ては葦名を黄泉還らせて欲しいという孫の切実な願いからであつた。

「ぬうつ……」

そう苦悶の声をあげるのは【剣聖】葦名一心

葦名を黄泉還らせるには竜胤の御子の忍びである隻腕の狼【隻狼】と戦わねばならなかつた。

そして死闘の末一心は敗れた。

己の力、技全てをだしてもすぐ後ろで立っている【隻狼】には及ばなかつた。

だが自分よりもあらゆる流派を飲み込み、強くなった者と戦えたことに一心は満足をし、倒れようとしている。

「……かあ!!!」

だが倒れてはならぬ、最期まで武士として生き抜くと誓っている一心は気合いで持ちこたえ、正座をする。

「やれい!!!」

そして最期の介錯を狼に任せる。

狼は背中から不死をも斬り殺す【不死斬り】を用いり一心を斬る。

「見事じゃ・・・隻狼・・・」

「・・・やっば」

(それが儂が最後に聞いた言葉だったはずじゃ・・・)

目覚めた儂はそう考える

あの時確かに隻狼に斬られて死んだはず・・・

だがこうして意識がある

その事が儂を混乱させた

更にはあの時消えていたはずの隻狼が持っていた不死斬りとは別のもう一振りの不死斬り【開門】が手元にあった

服装も弦一郎によつて黄泉還った時と全く同じ服装を着ていた

(・・・とりあえず、周りを見てみるとするかの)

自身の状況を把握した儂はそう思い周りを見渡す

周りは石の壁で囲まれており恐らく家と家の間の通路にいと予測できた

少し遠くからは光が見え賑やかな声が聞こえてくる

その方向に惹かれるように足を進めてみると

「なんと・・・!!」

初めて見た光景が広がっていた

右を見ても左を見ても人が沢山歩いており活気盛んに賑わっていた

更には

「あの耳が長い方は何者なんじゃ・・・?」

耳がとんがっていたり、獣のような耳やしっぽがついていたりと

一話「剣聖は神々が降り立つ地に目覚める」

「ふむ、ここはオラリオと申すのか」

「ああ、そうさ。ここは世界の中心とも呼ばれあらゆる種族、情報が集まる都市。それが迷宮都市オラリオだ。」

（成程、あらゆる種族が集まる都市か・・・じゃがそれよりも気になることがあるの。）

「迷宮都市とは何故そのような名が付けられたのじゃ？」

「そりゃああんた、ここに迷宮（ダンジョン）があるからさ」

「だんじょん？聞いたことがない名だな」

「あんたダンジョンも知らないのか!？」

そう言う男は一心にダンジョンについて教えた

曰く「世界三大魔境」と呼ばれるものの一つに数えられている

中に入ると階層構造上になっておりそこから下に降りていくという

だがそれよりも一心が興味を持ったのは

「もんすたーじゃと？」

モンスターであった

（葦名では聞いたことも無い名じゃ・・・）

「モンスターも知らないのか？ あんた本当に何処の田舎からやってきたんだ？」

簡単に説明を聞くと定期的にダンジョンから生まれ、地上に出てこようとするらしい

そしてそれを防ぐべく戦っているのが

「俺たち【冒険者】って訳だ」

【冒険者】、聞くにはモンスターから得られる魔石やドロップアイテムで収入を得ているという

「見たところあんた、武器も持っているみたいだし冒険者志望か？その歳でよく来たもんだ」

「どうやら刀を持っていたため一心は冒険者志望と間違われたらしい

「あんだ、何処のファミリアか？それとも何処のファミリアを志望しているんだい？」

「いや、ファミリアとやらはまだ決めておらんのでな。ファミリアとやらに入らんとダンジョンには入れないのか？」

「まあ、そうだな。下に行けば行くほどダンジョンってのは強いモンスターが出てくるんだが1番上の階層でもファルナを受けていなければ死ぬこともあるぞ」

(ファルナ、ファミリアとまた知らぬ言葉が出てきたな)

「すまんがファミリアとファルナとやらも教えて貰ってもよいか？」

「それすらも知らんのか・・・本当にどこから来たんだよあんだ・・・」

そう言いながらも優しく教えてくれる男に一心は感謝する

ファミリア——神の眷属の意味で、下界に降りた神が恩恵を与えた人々を集めた組織。そして恩恵と言うのがファルナだという

(まさか神そのものがこの地に降り立っていとほ・・・)

思いもよらない事実に一心は驚きを隠せないでいた

「おっ、もうこんな時間か。んじゃ、俺は仲間が待つてるからここら辺でお別れといこう」

「おうーそうか、ならば俺はファミリアを探してみるとしよう。お主には感謝しておるぞ」

「ははっ、気をつけてな」

「お主も気をつけて挑むのだぞ」

(さて、とりあえずはファミリアとやらを探してみるとしよう)

去っていく男を見たがそう考えている一心だったが

(はて・・・ファミリアに入るにはどうすればよいのじゃ?)

ファミリアに入る方法はともかく何処にあるのかすら分からなかった

二話 「劍聖、炉の女神と出会う」

「ファミリアを探すとは言ったが・・・どう探せば良いか聞くべきじゃったな」

何せ見知らぬ土地なのだ、何処に行けばファミリアがあるのかが分からない

(とりあえず歩いてから考えるところかの)

そう考えながら一心は足を進める

まず思うことはやはり此処は葦名とは全く違う場所だということだ

初めに建物。一心が知らない建築法、素材を使用している。葦名の民家よりも硬く、丈夫に作られている。

それに加えて耳の長い人や、獣耳や尻尾を持っている人。どれも葦名では聞いたことも見たことも無い。

まるでーーーーー

(まるで全く異なる世界に来たようなものじやな)

そう考えてしまうほどであった

(じやが、まだ異なる世界に来たとは決めれんな)

己の中で結論づける前に考えを一蹴した一心は近くで屋台販売をしている女性に声をかける

「すまぬが、少しいいか?」

「おつ、いらつしやい。何か用かい?」

「ファミリアとやらに入りたいのじやが何処に行けばよいのじやろうか?」

「ファミリアかい? そうだねえ・・・なりたいものによっちゃ変わるけどお前さん、何志望だい?」

「冒険者志望じやが」

「それならばロキ・ファミリアがおすすめさ。今やこのオラリオの地最強と謳われているファミリアだよ」

ふむ、この地で最強と謳われておるファミリアか・・・

「そんなに有名だと入りにくそうじゃが、どうじゃ?」

「あたしに聞かれてもわからないよ。あたしはそういうのとは無縁だったからね」

成程、ファミリアに入らないというのも一つの手か

「……いや、そうなってしまうとダンジョンには入れないのだったな

「何処でもいいってのなら直接ファミリアに申し出るのもありだよ。後はそうだね……昔は多かつたけど此処のような人が沢山集まる場所ですら勧誘してくる神様もいるよ」

「なんと……神自ら勧誘するとはな」

「まあね、下界に降り立ってすぐは誰も知らないからね。自分から探しに行かないといけないんだと思うよ。」

「運が良くなければだが自分のファミリアにならないかと持ち掛けてくる神と出会うこともあるのか

「ならば、歩いてファミリアを探しつつ神を見つけたらファミリアに入れてもらえるか相談してみるとしよう

「とても良い情報を聞けたぞ、もしまた来た時には何か買っていこう」

「そうかい。頑張つて入れてくれるファミリアを見つかるんだよ!」

そう女性に感謝の言葉をかけて離れる

今日だけに入れてくれるファミリアがあれば良いのだが……

「命は団員を募集していなくてね……すまんが他を当たってくれ」

「そうか……すまぬな」

「そう言った男は扉を閉じていく

(此処もダメじゃったか……)

人から近くにあるファミリアを聞きながら訪ねてはいるが尽く断られてしまう

何度目か分からない入団失敗に肩を落とす

(まさかここまでかかるとはな・・・)

時間は既に夜このままだと無一文なので野宿するしかなくなってしまう

そうなる前に早く入れてくれるファミリアを見つけねばと考えていると

「うおわっ!!」

「むっ」

少女とぶつかってしまう

「いったたく」

「お主、大丈夫か?」

ぶつかってしまった相手に手を差し伸べる

その手を相手は自身についた汚れを落としながら握ってくれた

「うん、別にどこもけがをしていないよ」

「そうか、それならばよかった。考え事をしていての」

「考え事?」

「ああ、そうじゃファミリアに入りたいのだが中々入れてくれる処がなくての」

「え?君、ファミリアに入りたいのかい?」

ファミリアのことについて話すと途端にその少女は目を輝かせながら儂の顔を見てきた

「そうじゃが?」

「本当に?本当にファミリアを探しているのかい?」

「そ、そうじゃが・・・」

「だったらさ!僕のファミリアに入らないかい!!」

突然何を言い出すかと思えばファミリアに入らないかと?しかも僕のこととは

「お主・・・まさか神か?」

「そうさ、僕は炉の女神ヘステイアさ!!」

まさか神と出会うとはな、だが想像していた神とは違ったな・・・

その考えが顔に出ていたのかヘステイア神は少し不満そうな顔をする

「今、僕のこと本当に神様が疑ったでしょ」

「すまぬな、神と聞いたら見るだけで威厳があると思っていたからの」

「それは僕達神は地上にいるときは【神威】を抑えているからさ」

「【神威】とな？」

「うくん、簡単に言うときつき君がいった威厳って感じかな。こう…僕が神様だよって分からせる力のようなものさ」

なるほど、それが地上にいる間は抑えられているから神と簡単に分からないのか

「で、どうだい？僕のファミリアに来ないかい？」

「誠に良いのか？」

「もちろん！僕としては眷属が増えるし困らないとも!!」

歓迎してくれるならば断る理由はないな

「よし！ならば僕はヘステイア神のファミリアとなろう!!」

「まさか2日連続で眷属が増えるとはね！あつ、そういえば君の名前は？」

「僕は葦名一心じゃ」

「じゃあ一心君、僕のファミリアへようこそ!!」

「うむ、よろしく頼むぞヘステイア神」

????????????????

「神様はまだかな」

「そう言いながら僕は夕飯の準備をしている」

????????????????

「神様とはヘステイア様。僕をファミリアに入れてくれた優しい神様だ」

「神様今日は朝から「僕は新しくファミリアに入れる人を探しながらバイトをしてくるよ！」って言って出かけたけど見つけれこられたの

かな…」

かな…」

いつも寝る前に「この調子で団員を増やしていこう！」なんて言つてたけど・・・」

「ベル君く戻ってきたよ！」

「あつ、神様おかえりなさい！・・・つてその方は？」

神様が帰ってきたので入口を見ると神様の後ろには少し大きい人が

「この子かい？この子は葦名一心君！今日から新しく僕のファミリアに入る子さー！」

「え!?新しく入る人ですか!？」

まさか本当に見つけてきたんですか!？」

「そして一心君、この子がベル君だ。僕の初めての子だよ！」

「そうか、お主がベルか」

「はっ、はい！ベル・クラネルと申します!!」

ちよつと怖い・・・僕と違って大きいししつかりと鍛えるし・・・

「かっかっかっ!!そう怖がらなくても良いぞ。べつにとつて食ったりせぬからな。ヘステイア神から聞いたとおり儂は葦名一心。今日からヘステイア・ファミリアに入る者じゃ、よろしくな」

「あつ、はい。よろしくお願ひします・・・」

あれつ、思ったより怖くない人かも

「あつ、晩御飯どうしよう・・・。2人分しか作ってないんですよね」

「大丈夫さ、ここにバイトで貰ったじゃが丸君があるからね!!それじゃあ晩御飯といこう。一心君もどうだい？」

「神からの誘いなら断れんな、酒はあるかの？」

「流石にお酒はお金が無いから無いよ・・・」

「一心さんって何処からやって来たんですか?」

「そういえば僕も聞いてなかったな。一心君って何処から来たんだい
?」
「来たというかどうかは分からぬが・・・気づいたら此処にいたんじや
よ」

「気づいたら・・・ですか?」

「そうじゃな・・・お主らは葦名という国を聞いたことはないかね」

「葦名ですか・・・すみません、僕は聞いたことがないですね。神様は
どうです?」

「僕も聞いたことがないよ、でも一心君が嘘を言ってるわけでもない
ようだし・・・」

へステイア神も知らぬとはな・・・どうしたものか

「そうか・・・まあよい、いずれ解決するじやろう」

「あつ、なら一心君ちよつといいかな」

「どうしたへステイア神」

「ファルナを受けないかい?」

三話 「劍聖、恩恵を授かる」

「ファルナ・・・じゃと?」

「そうさ! 今日から君も僕のファミリアに入るんだ、それと僕からファルナを受けないとダンジョンにも行けないしね」

おおつ、そうじゃった。ファルナを受けなければダンジョンの1番上でも死んでしまうらしいからの。すっかり忘れておったわい

「しかし、ファルナを受けるにはどうすれば良いのじゃ?」

「簡単さ、服を脱いでそのベットにうつ伏せになってくれればいいよ」

「服をか?」

少し不思議に思ったが言われるとおりに一心は服を脱ぎ、ベットにうつ伏せになる

「あつ、じゃあ僕は皿洗いをしておきますね」

ベルはそう言いながら皿を洗い場へと持っていく

「ヘステイア神よ、言われた通りしたが・・・」

「そうかい? なら少し待っててくれよ?」

ヘステイア神が何か物を探し手に持つと一心に近づいてき、そして「よいしょ」と一心の背中に乗ってきた

「さくて、君にファルナを授けよう・・・って・・・」

「・・・? どうした、ヘステイア神」

徐々に声が小さくなったヘステイアが気になって一心は頭を少し後ろに向けるとそこには驚いた顔をしたヘステイアが居た

(なんだい・・・これは・・・)

ヘステイアが凝視していたのは一心の背中だ

ただの背中ならば凝視する理由がない

ならば何故凝視したのかという

斬られた、突かれた、撃たれた

そう思わざるを得ない一心の逞しい背中に帯びた無数の傷跡であつた

「一心君・・・この傷って・・・」

「ん？おお、すまぬな。流星に神といえどこの傷は堪えるか、服を着た方が良いじやろうか」

「あつーいやいや、服を脱いだ肌をさらけ出した状態じゃないとファルナを受けれないんだ。ってそんなことより！どうしたんだい一心君！こんなに沢山傷があつて！」

会話していた時、服の隙間から多少の傷が見えており、ああ何か訳でもある子なんだろうなとは思ってはいたがそれは氷山の一角でしかなかつた

明らかに殺意^{????}一心を殺す気で付けられた傷だ

それも前だけではなく後ろにもあるという事は前から後ろからも敵に狙われていたという事

すなわち死地である

それを何度も繰り返したと思われる無数の傷

これを見たヘステイアは一心への質問を止めれなかつた

「すまぬがヘステイア神といえどそれはまだ言えん。必ず時がきたら話すので許してはくれぬだろうか」

流星に出会つてすぐの神に実は死んで気づいたらここにいたとは言えん。更に少し奥にはベルもいる、あの子には儂の話は酷じやろう・・・そうかい、分かつた。だけど一心君これは信じて欲しい。僕は君からどんな話を聞こうとも態度を変える気もないしファミリアから追い出す気もないよ」

「すまぬな、ヘステイア神」

こんな慈悲深い神に拾えてもらえて感謝しかないわい

「さて、それじゃあ今度こそ君にファルナを授けよう!!」

そう言うヘステイアは懐から取り出した針を自分自身に刺す

「!?ヘステイア神、何をしてるんじゃない?」

「ん？ああ、ごめんごめん。ファルナを授けるには僕の血——」
「神血（イコル）」が必要なんだ」

なるほどのう・・・神の恩恵だから神の血が必要なのか

ヘステイア神が滲み出る血をそつと儂の背中へと滴り落とした
その瞬間儂は比喩抜きで儂の背中で波紋を広げたのを感じた

「ふふつ、不思議な感じがするだろう？ベル君も最初は驚いたさ」

「かっかっかっ、確かにこれは驚くわい」

ヘステイア神は血を落とした場所を中心になぞり始め、左端から
ゆつくりと何かを書いておつた

「ヘステイア神、今は何をしてるんじや？」

「今かい？今は君のステータスを刻んでいるんだよ」

「すてーたすじやと？」

「そうさ、そしてそれこそが神の恩恵——【ファルナ】——さ」

ヘステイア神が言うには神達が扱う【神聖文字】ヒエログリフを神
血に媒介にして刻むことによって対象の能力を引き上げる、神達のみ
に許された力らしい

「その様子だと一心君、【経験値】も知らないね？」

エクセリア

【経験値】。様々な出来事を通じて得られる、言葉通り経験した事象ら
しい。

不可視で下界の者たち、儂やベルのような人にとって

は手に取って利用できる代物ではない。言

わば自己の歩んできた歴史そのものだという。

じやがヘステイア神、神達にはその歴史に埋もれてい る一
つの軌跡を引き抜いて——例えば『モンスターを倒した』——、成長
の糧へと変えられるらしい。

成し遂げた事の質と量の値、【経験値】。

神にはそれが見え、更に料理することができるといふ。

背中の【神聖文字】を塗り替え付け足し、レベルアップ、能力向上。

この力によって神達は我々に持ち上げられるという

「.....」

そんな事を聞いていると突然ヘステイア神の言葉が止まる

「どうした、ヘステイア神。ステータスとやらはもう書き終わったのか?」

「ん?あ、ああ。終わったんだけどね……。ちよつとこれを見てくれないか?」

そう言うとヘステイア神は1枚の紙を儂に渡した
それを見ると

葦名 一心

Lv. 1

力： I 0

耐久： I 0

器用： I 0

敏捷： I 0

魔力： I 0

《魔法》

【 ー 】

《スキル》

【葦名無心流】

- ・ 早熟する
- ・ 心持が続く限り効果持続
- ・ 心持の丈により効果向上

「……………なんじゃ、これは」

渡された紙に書かれてた言葉は全くわからなかったが最後の文字は何故か分かった

葦名無心流ーそれは儂が隻狼のみに伝えた流派じゃ

「この書かれたことは分からぬが葦名無心流というのは分かるぞ」

「本当かい!?それは一体なんだい?」

儂はヘステイア神に葦名無心流が生まれた理由を話す

「うくん、話を聞いてもよく分からないけどつまりその葦名無心流っ

ていうのは君が開けた流派で更に強くなるためのなんだね？」

「そうじゃ、儂は強さに飢えておるからの」

「となるとその強さの飢えがスキルになるほど強いつてことか・・・」
そう言いながらヘステイア神は意を決したように話す

「一心君、君のスキルは恐らくステータスの成長を早める効果があるんだ。恐らく、普通の人よりも君より何倍も」

なるほどなそれは

「それは厄介じゃな」

「そうなんだよ！明らかに成長が早すぎると他のファミリアから因縁つけられるかもしれないんだ！だから君には話すけど他のファミリアには絶対に言わないでね。あ、ベル君には僕から後で話しておくよ」

「すまぬな」

確かに二人しか入っていないファミリアなど因縁を付けられれば直ぐに襲撃されてしまうからな

そう考えているとヘステイア神が何やら悶えていた

「?どうしたヘステイア神」

「ん?!いいいやいやなんでもないよ!!」

「そうか・・・」

ヘステイアが悶えていた理由は

(なんでこの子もうランクアップ可能なんだい!?)

既にランクアップが可能だったことだ

更に1回だけならばまだ良かったが2回か3回、はたまた5か6回も可能だったかもしれない可能性にヘステイアは驚いてた

なぜならランクアップには神々すら認める偉業をこなさないといけないのだ。

殆どは自分より格上を倒すことでランクアップ可能になるのだが、それに例えると一心は自分より格上を一度だけではなく何度も倒したということになるのだ

だがランクアップにも条件があり、何れかのステータスがD以上で

なければいけない

(だとしても直ぐにはランクアップはしないけどさ・・・ってことは一心君すごくないか!?ファルナすら受けてない状態で格上に何回も勝つなんて)

もしかしたらとんでもない逸材を連れてきてたかもしれないと考えてるヘステイアは

「すまぬが、ヘステイア神・・・儂にはまったくこれが読めんのじやが・・・」

「えっ、あつそうなの!?もしかして言葉分らないのか!ちよつとベル君手伝って!!一心君に勉強だ!!」

ベルと一緒に夜遅くまで一心に言葉を教えたのであった

翌日一心はベルとヘステイアと一緒にダンジョンに行くために歩いていた

「すまぬなベルとヘステイア神よ、昨日は夜遅くまで教えて貰ってな」

「いえいえ、一心さんの力になれたのなら良かったです。」

「僕もさ。逆に驚いたよ、あんなに飲み込み早いなんて」

ヘステイアとベルが一心に言葉を教えさせたのだが、わずか2、3時間で日常会話に支障をきたさない程度に読み書きはできるようになったのだ

「流石にこの歳になって勉強とはどうかと思つたのじゃが良かったわい」

「凄いですよね、僕なんて本なんか全く読まないの・・・魔法が全く発動しないんですよ」

かっかつと笑う一心にベルはそう零す

「ふむ、本を読めば魔法とやらが発動するのか?」

「いや、あくまで可能性さ。そうした方が発動しやすいってだけだよ」

「なるほどな、あくまで可能性だと・・・」

そうこうしていると目の前に大きな建物が現れた

「ヘステイア神、ここは？」

「ここはギルドさ！ダンジョンに入る前に僕のファミリアに加入しておかないとダンジョンにすら入れないのさ」

成程、だからあの男はファミリアに入った方がいいと言っておったのだな

「付いておいで」とヘステイア神にいわれついて行った

中に入ると沢山人がいるのは最初に目覚めた場所と変わらないが殆どの人が装備を着け、腰に武器を携え賑わっている

それに街で見たよりも沢山耳が長い人が尻尾がある人など特徴を持った人たちがいた

「ヘステイア神、あの身体に耳や尻尾が生えてるお方がいるが・・・」

「彼らは獣人さ、鋭い五感と高い身体能力を持っていてね犬人や狼人、狐人がいるんだよ」

「ほう、ではあの耳が長いお方は」

「あつちはエルフだね、彼らのほとんどは魔法の使い手だよ」

「ならばあの逞しい大男は」

「彼はドワーフ、見た目通り力自慢が多いよ」

「そうか、ならばぜひ手合わせをしに・・・」

力自慢と聞き興奮が収められずにいると

「ダメだよ一心君！ここで揉め事起こすと面倒なんだから！！ただでさえ貧乏なファミリアなのに賠償とかしたら無一文になってしまうよ！！」

そうヘステイア神に止められてしまった

確かにここで揉め事を起こしてしまうのはまずいな

「すまない、ヘステイア神。少し血が滾っておったわ」

「おおっ、中々怖いこと言うね・・・」

「あつ、エイナさん！！」

ふと見るとエイナとベルに呼ばれた女性はこちらに振り向く

私????????????????????
私の名前を呼んでこつちに走ってくる少年はベル。

私の担当している冒険者だ

「ベル君、今日もダンジョンに行くの?」

「はい! そうなんですけど後は新しくファミリアに入った人がいて・・・」

まさかハスティア・ファミリアに新しい人が来るなんて

「成程、申請をしに来たってことね。ちなみにその人は?」

「儂じゃ」

そう言っつてベル君の隣に現れたのは高さが2mに届きそうと思うほどで、着ているものは辛うじて着物と判断できそうな服装をしている男だった

「お・・・おはようございます。私、エイナ・チュールと申します」

「おう、儂は葦名一心という。よろしく頼むぞ、エイナ殿」

その体格に驚いて萎縮ながら声をかけると一心さんと呼ぶ人は笑いながら自己紹介をしてくれた

「実は昨日ハスティア神に勧誘されてな、行く宛もないのでこうして加入したというわけじゃ」

「成程、でしたらこの書類に必要な事項を書いてください」

渡した紙に必要な事項をすらすらと書いてくれるとふと一心さんの手が止まった

「どうされましたか? 一心さん」

「いや、この要望する担当とは一体なんじゃろうかと思つてな」

「それはですね、冒険者には私のような担当アドバイザーが付きます。そして冒険者の方にも好みがあると思うので一応聞いております」

ちなみに本当に一応である。書いた要望通りの人が来るのは殆どない

「そうか・・・ならば強き者とも書いておくか」

「待つてください! ギルドは永久中立の立場なので職員は全員非戦闘員です!!」

「む、ならば特に要望もないな」

そう言うと言書類をこちらに渡してきた

「ありがとうございます、それでは一心様。ようこそオラリオへ、私たちギルドは貴方を歓迎します」

「うむ、こちらこそよろしく頼むぞ」

「でしたら、担当アドバイザーを決めるのですが・・・」

私が受け持ってもいいんだけど流石にベル君と他の仕事に追加で出来ないでしょう・・・誰か受け持ってくれる人がいないかな

そんな事をエイナが考えていると

「ならば、私がそいつを受け持とう」

奥から一人の女性がやってきた

「え!? ヘルタさんがですか!？」

「失礼だが、エイナ殿。そちらの方は?」

「こちらの方はヘルタ Ⅱ マテウスさん。私の上司です」

ヘルタ Ⅱ マテウス。彼女はエイナの上司でエイナよりも何年も担当アドバイザーをしてきた女性だ。だが

「ですがヘルタさん、貴方は1年前に担当アドバイザーをやめたはずでは!」

そう、エイナの言った通り担当アドバイザーを既にやめていたのである

「なあに、別にLv1の冒険者だ。君みたいに自分の仕事をしながらでも出来るさ」

「確かにそうですねまだ一心さんの許可が・・・」

「ふむ、儂は別に構わんぞ」

「え?! いいんですか!？」

まさか殆どの冒険者がこの担当がいいと言う中、別に構わんと言った一心に驚きを隠せない

「ふつ、では話は決まりだな。話は聞いていたよ葦名一心殿。聞いての通り私はヘルタ Ⅱ マテウスだ。よろしく頼む」

「うむ、よろしく頼むぞ。ヘルタ殿」

「え、ええ・・・」

まさかトントン拍子で決まると思ってたのでエイナは取り

残されていた

「では、エイナくん。これから葦名一心殿は私が務める。それでいいな?」

「は、はい・・・それで構いません・・・」

「ふむ、ならば一心殿。こつちについて来てくれるか?」

「ああ、よいぞ。すまぬがベル、ヘステイア神。失礼するぞ」

「あ、ああ・・・じゃあ僕もバイトの時間だし・・・」

そういうとヘステイアもギルドから離れる

そして取り残されていたベルは

「じゃ、じゃあベル君。少しダンジョンのおさらいでもしようか」

「は・・・はい・・・」

エイナによる勉強が始まったのだ

????????????????????
ベルタ殿に連れてこられたのは個室部屋であった

「では、そこに座ってくれ」

?????そう指示された場所に座る

「さて、私が君の担当アドバイザーになった理由は分かるかい?」

理由じゃと?全く知らぬ人の理由など分からぬな

「分からんな」

「正解は君の強ささ」

「僕の強さじゃと?」

何を見て僕を強いと見たのかがさっぱりわからんな

「何故という顔をしているね。少しだけ教えようか、私は一年前まで担当アドバイザーをしているのは聞いたね?」

「ああ、聞いたぞ」

「その時は沢山冒険者を片持ちしてやっていてね、少しだけわかるんだ。面白そうな奴とそうじゃない奴が」

「ふむ、つまり儂は面白そうな奴ということか」

「その通りさ、私が担当アドバイザーをしていた時の冒険者よりも面白そうに見えるよ。何ならロキ・ファミリアの連中より面白く見える」

ロキ・ファミリアの連中よりも？

「まさか、かのロキ・ファミリアより面白く見えると言われるとわな」
「ふっ、まあ私が君の担当を受け持った理由がそれさ。将来彼らよりも大きくなると思ってるからね・・・」

「かつかつかつ!!そう言われると儂としても負けられんな!!」

「ははっ!!そう言うと思ったよ!やっぱり受け持ってよかったよ」

「ふう、では話はこれくらいにしようか」

「む?もうよいのか」

「ああ、君だって早くダンジョンに潜りたいんだらう?」

流石にバレておったか

「君の顔から早く行きたいという感情が漏れてるよ」

「すまぬな、どうも抑えきれんかったわ!!」

「いいさ、元々そこまで長く話すつもりはなかったからね。では戻ろうか」

「戻ったぞベルよ」

戻るとそこには疲れ果てたベルがおった

「あ・・・」心さんおかえりなさい・・・」

「ど、どうしたベルよ何があった!」

ダンジョンに潜る前にそんな疲れることがあったかと思うと

「すまんな、一心殿。どうやらエイナの馬鹿がその小僧にみっちりダンジョンについて教えこんだらしい」

「だって心配するじゃないですか!ダンジョンで何かあってからだでは遅いですし!」

ヘルタ殿の方を見るとそこにはエイナ殿の頭を叩いていた彼女の姿があった。叩かれたエイナ殿はというと

叩かれた頭をおさえながら反論していた

「だからって疲れさせるまでやるか馬鹿者！しかも私と一心殿が離れて少ししか経ってないじゃないか！逆にその短い時間でここまでどう疲れさせたんだ！」

「いや……ですが……」

「いやではない！……すまぬが一心殿ベルを連れて行ってくれ。私はこいつに説教をしなければならん」

説教という言葉聞いたエイナ殿は真っ青な顔をしていた

「えっ、いや、それは流石に許してください……」

「お断りだ、ではな一心殿」

「あ、ああ……」

そういうとヘルタ殿はエイナ殿を人が引っ張って奥に消えていった

「では……ダンジョンに行くか、ベルよ」

「はい……行きましょうか……」

「心さん、ここがダンジョンです！」

「おお!!ここがか!!」

ベルに連れられやってきたダンジョン
想像していたよりも高く大きくそびえ立っていた

「ベルよ、上にあるのはなんじゃ？」

「あれはバベルといって神様が住んでいたり、色々な物が置いてあったりしますよ」

成程、神や色々な物が置いてあると

「ふむ、ならば今度寄ってみるとしようか」

「ではダンジョンへ行きましようか」

「ああ、参るぞー！」

今より剣聖による迷宮攻略が始まる

????????????????????

【韋名無心流】

若き一心は、留まることを知らぬ男であつた
貪欲に、より強さを、より高みを目指し続け
その果てに国を盗つたのだ

無心に、あらゆる流派を飲みこみ続ける

その心持こそが、元来の一心である

ゆえにこの流派、生涯未完なり

四話「劍聖、迷宮に挑む」

ベルと共に一心はダンジョン一階層に降り立った

そこは視界を埋めつくす薄青色の染まった壁面と天井

空の見えない天然の迷路がどこまでも途切れることなく続いている。

二股道、十字路、緩やかな下り坂。一定間隔で整った道がある地下空間を二人は歩いていった

「そういえば、ベルは何故オラリオに来たんじゃ?」

「僕は田舎で祖父と暮らしてて、幼い頃祖父から冒険譚を聞かされて冒険者に憧れてたのと夢を叶えるために来ました?」

「ほう、夢とな。それはなんじゃ?」

「ハーレムです!!」

はーれむ・・・じゃと?」

「ベルよ、ハーレムとは・・・」

「知らないんですか一心さん!」

いきなり大声で叫んだベルに一心は驚く

「お、おお。全く知らんのじゃよ、教えてはくれぬか?」

そう一心が聞くとベルは目を輝かせながら話す

「ハーレムとはですね!男の浪漫であって、男なら目指すべき夢ですよ!!」

なるほどな、男の浪漫で目指すべき夢か・・・今度へステイア神にでも聞いてみるか

「後は祖父が僕の背中を押してくれた事もありますね」

「ほう、その祖父は今もお主の故郷にいるのか?」

「・・・亡くなりました、事故でモンスターに襲われて」

「そうか・・・すまぬな」

まさか亡くなっているとは思わず、聞いてしまった自分を反省する一心

「でも、祖父が最期に冒険者になつて夢を叶えるのならオラリオに行けと言ってくれたので・・・一心さんにも子供とかいるんですか?」

「おう、義理の孫じやが葦名弦一郎と言う子がおつてな」

一心はふと孫を思い浮かべる

「儂が病に伏せていた頃儂の代わりに葦名の国を指揮してくれての、剣だけではなく弓も上手い自慢の孫じやったわ」

「そうだったんですね。でもだったって事は……」

「ああ、既に死んでしまったのじや」

正確には自らの命を使って一心を黄泉還らせたのだが「だからかの」

そう言いながら一心はベルの頭に手を置く

「お主が孫のように思えるのじやよ」

「一心さん……」

「すまぬな、暗い話をしてしまって」

「いえいえ！僕も気になって聞いてしまったのが悪かったので」

「よく出来た子供じやの、お主は」

一心はベルの頭をワシヤワシヤと撫でる

「あつ、やめてくださいよ一心さん！」

「カカカツ！すまぬな、どうしてもしたくなつての」

話が弾んでいると少し遠くから足音が聞こえてきた

「ベルよ、何か来るぞ」

「あつ、はい！」

急に真剣な顔付きになった一心に少し驚きながらも足音が聞こえてきた方向を見る

「グルル……」

現れたのは犬頭のモンスターであった

「ベルよ、あれは？」

「あれはコボルトですね」

「ほう、あれがコボルトか」

ベルから聞いた情報だと鋭い牙や爪を持ち、1匹か2匹で行動してるといったが

「数が多いですね……」

目の前にいるのは6匹であった

「一心さん、2人でやりましょう」

「そう言い戦闘態勢に入ろうとしたベルを止める」

「一心さん……?」

「すまんが、ベル。儂に任せて貰えないだろうか」

「それを聞いたベルは驚く」

「駄目ですよ!1匹や2匹ならまだしも6匹はLv1の僕らにはキツイですよ!昨日恩恵を授かったばかりの一心さんなら尚更ですよ!」

「確かにそうじゃが、お主からあやつの情報聞いておる。危険と判断したら加勢しても構わんぞ」

「……分かりました、危なくなったら加勢しますからね」

「そう言いベルは少し後ろに下がる」

「わがままを聞いてくれて事に一心は感謝する」

「さて……」

「一心はコボルトの方に向き直す」

「コボルトは真ん中と左右に2匹ずつ分かれて包囲網のように一心を囲もうとしている」

「儂の初陣じゃ、腕が鈍ってないかお主らで試させてもらおう」

「腰から刀　　ー　　ー　　ー【開門】を抜き構えをせず、目の前のコボルトに目を合わせる。そして少し前のめりになった瞬間」

「ギツ?」

「1匹のコボルトが縦に両断された」

「何が起きたのかはベルも、他のコボルト達も分からなかった」

「(一心さんさつきまで僕の目の前にいたのに、僕にはただ一心さんが前のめりになったと思っただらコボルトがいつの間にか斬られたようにしか見えなかった……)」

「魔法でも使ったのかと驚くベルを置いて一心はそのまま隣にいるコボルトも斬り伏せる」

「まずは2匹じゃ」

「ガアアア!!」

「更に左から爪で引き裂こうと飛び込んできた2匹に対して
「遅いぞ」」

「ギャ!?」「グエツ!」

スつと横に回避にし、無防備な身体に一刀する

魔石ごと砕かれた2匹は直ぐに灰と化し消える

「さて、残りを片付けるとしよう」

恐怖し、身体が動かないでいる残りのゴボルトに一心は時間をかけまいと詰めて行った

「ふう、これでお終いかの」

血が付いた刀を振り、鞘にしまう

(初めてのダンジョンでの戦いじゃったが思ったより腕は鈍ってなかったようじゃ)

ベルはどうしてたかと思い、ベルの方向を見ると

「凄いじゃないですか一心さん!」

驚きながらベルがこちらに向かってくる

「ゴボルトをあんな一瞬に・・・!!しかもあれだけの数を相手に!」

そこまで褒められるとは思ってもよらんのだったが

「ふむ、それほど凄いことかの?」

「そりゃあ凄いですよ!!僕はあるに早くゴボルトを処理する事なんか出来ませんからね」

そう言いながらベルは儂が倒したゴボルトの死体を漁る

「ん?何をしてるのじゃ?」

そしてベルが死体から手に入れたのは小さくかがやく紫紺の欠片だった

「魔石を取り出してるんですよ、モンスターの中には魔石があって、それを集めて稼ぐのが僕達冒険者なんですよ」

ベルが魔石を取ると取られたゴボルトは頭からぼろりと崩れ、全身が灰となって消えた

「今のが魔石を取られたモンスターの末路です。魔石はモンスターの【核】で、これを基盤としてモンスター達は活動してるみたいです。」

「だが儂が斬った2匹は直ぐ灰となって消えたぞ」

「それは魔石ごと斬ったからです、魔石が手に入らない代わりに直ぐに倒せるので危険な状態なら僕も狙いますよ」

なるほどのう、冒険者の資金源にもなる上にモンスターの弱点になるのか

となると身体を斬るより首を斬った方が良いのかもしれないな

「よし、全部取り終わりましたよ」

「すまん、ベルよ。今度儂も練習してみよう」

「なら後で教えますよ。それですね、一心さん。今回5階層まで行ってみたいんですよ」

5階層までか？じゃが・・・

「今日は4階層までと言わんかったか？」

「そのつもりだったんですけど、僕は今までソロで潜ってたので2人に増えた今なら少しだけ下に行っても大丈夫かなって。どうでしょうか」

「儂は別に構わんが・・・」

何故か胸騒ぎがした一心は少し躊躇ったが

「なら行きましょう!!そろそろ他の冒険者の方もやってくると思うので!」

「おい、待つのじゃベルよ!」

意気揚々と下に向かっていくベルを追いかける事にした

2階、3階、4階層と特に危険なことがなく突破できた2人は5階層へと足を進めた

「やっぱり一心さん強いですね。同じL.V.Iとは思えませんよ」

「儂は昔から剣を使っていたからの、そこら辺のモンスターに遅れをとることはせんわ」

「そうなんですか、だったら強いはずですよ」
話しながら歩いていたがふと一心が止まる

「一心さん？」

疑問に思ったベルが一心に声をかけると

「ベルよ、モンスターが見当たらないのじゃが」

そう一心が答えた

確かに一心の言う通り本来ならモンスターがいるはずのフロアに
一体も現れていない

「おかしいですね、数が少ないのはあるんですけど……。遠くから見
た感じ他の冒険者が戦った形跡もないですし」

「真ん中から確認したいのじゃがよいか？」

「分かりました」

ベルに確認を取って少しずつ前へ進んでいく

フロアの中央にたどり着いて近くから見ても、モンスターと冒険者
が戦った痕跡がなく血の一滴すら地面に落ちていない

極め付きはモンスターの気配すら感じない。まるでこここのモン
スター達が「何か」に恐れ身を隠してるかのようにも思えてきた。

(流石にここまで不気味だと攻略する気にもなれんの……)

「ベルよここは一旦ダンジョンから……ベル？」

ダンジョンから抜けようと提案するため後ろを向くと何やらベル
が怯えていた

「あ……あつ……」

「おい、ベルよ何があった」

ベルの身体を揺さぶり声をかけるが目を合わせずかすれ声を出
すばかり……目を合わせず？

ベルはさつきから一心の後ろを見てばかりである

(先ほどからベルはどこを見ておるんじゃ?)

気になった一心はふと後ろを向くと……

そこにいたのは一心よりも大きな体格で牛の頭を持ったモン
スター【ミノタウロス】であった

『フウー、フウー……!!』

息を荒げながらこちらに近づいてくるミノタウロス

本来なら12階層以降に出るはずのモンスターが5階層にいることに驚きを隠せないでいた

(ベルが言うにはこのようなことは「異常事態」というらしいが、流石にここまで予想できる奴はおらんわい)

「ベルよ、立てるか?」

問いかけるとベルは首を横に振る。どうやら腰を抜かしてしまっ
たらしい

「ならばそこで待つておれ、儂がこやつを何とかしよう」

「無理ですよ一心さん!ミノタウロスはLv2にカテゴライズされる
モンスターです!僕達Lv1では敵いつこないですよ!」

確かにベルの言う通り二人ともLv1、一心に至っては昨日恩恵を
授かったばかりなのだ

それでも戦おうと前に進む一心の横顔を見てベルは絶句した。
笑っていた……。この死地を前にして一心は怯えるでも不幸に怒る
のではなくただ……。笑っていた。

(どうして……。笑えるんですか)

それを見たベルは何も言えずに一心を見送ることしか出来なかつ
た

一心はミノタウロスにあと数歩で届く距離で止まる

「さて、ミノタウロスとやらよ。儂は葦名一心……。といっても言葉は
分らぬか、ならば」

—— 参れ、牛人よ ——

そう言うが如く一心は【開門】を抜き、構えた

「ヴオオオオオオオ!!」

叫び声をあげながらミノタウロスは右手に持った天然武器【ネイ
チャーウエポン】の大斧を一心目掛け振り下ろす。それを一心は刀で
弾き、右に受け流す。何とか身体の軸を保ったミノタウロスは今度は
一心の右手側から横に真っ二つにしようとするがこれも左に弾かれ
受け流される

「ほれ、どうした。儂を叩き潰すつもりではないのか？」

『~~~~~ツ!!』

一心の言葉を理解したのかミノタウロスは声にもならない叫び声をあげながら大斧を振り回し、それを一心は弾く

振り下ろす、弾く。薙ぎ払う、弾く。殴る、弾く。死闘が繰り広げている5階層では金属音とミノタウロスの叫び声しか響かない

その光景に——格上と互角に渡り合う一心に——ベルは目を奪われていた

(けど一心さん、なんで攻撃をしないんだろう・・・)

ベルの思う通り、一心はミノタウロスの攻撃を弾くばかりで攻撃をしていなかった。ベルのようなまだ確立した戦闘技術を持っていない人からはひたすらミノタウロスの攻撃を防ぐのに精一杯にしか見えない。だが見る人からすればそれは生死の狭間でしか繰り出すことができない「攻撃」である。

そして一心は機会をうかがっていた、己の一撃を与えられる隙を

(こじゃー！)

一心はミノタウロスが繰り出した振り下ろしを力強く左上に弾く。するとミノタウロスの腕が大きく上がり無防備に脇がさらけ出された

そこに狙いを定め突きを放つ

『グフウ!』

脇という弱点に放たれた突きは強靱な肉体を持ったミノタウロスといえど無視できる傷ではなくその場に蹲ってしまう

「まだ終わらんと!!」

致命傷まで至らなかったと理解した一心はそのままミノタウロスの後ろに回り——納刀する

葦名流奥義、それを使うため

ハアアと息を吐き斬ることのみに意識を置く

そしてミノタウロスの身体がこちらを向き目があつた瞬間

「せい!!」

大きく息を吸い一心は駆けた

ミノタウロスは目を疑った
自身に傷を与えた人間を殺す為、立ち上がり一心を見た瞬間そいつ
が目の前に現れた

先程まで遠くにいた人間が目の前にいる

その事実を疑いながらも叩き潰そうとしたミノタウロスは
自身の視界が左右に分かれ、身体が崩れていくのを感じた

斬ったミノタウロスは四等分となって崩れ落ちる

それを見た一心は剣をしまう

「葦名十文字・・・まだまだかの」

勘で魔石を狙ったが少し斜めに斬らさったため魔石には届かなか
った

(この技だけはエマに負けておるからの、精進せねばな。じゃが隻狼、
お主の技・・・盗んだぞ)

弾きとは自身の防御に加え相手への一撃必殺を狙える攻撃。それ
はかつて剣聖と謳われた一心を破った、隻腕の狼の技。

それを一心は見事飲み込んだ

(さて、魔石を取りベルの元に向かうとするか)

そう思いミノタウロスの死骸から魔石を取ろうと手を伸ばしかけ
た瞬間

「うわああああああああああああああああああ!!」

ベルの声が響いた

「ベル!?!」

驚きベルの方向を見るとそこにはミノタウロスがいた

まさかの二体目に一心は焦る

(二体目とは聞いておらんぞ!)

ベルに振りかぶった蹄が当たろうとする瞬間

一心よりも速い風が吹きミノタウロスの身体に線が走った

「え?」

『ヴォ?』

聞こえてきたのはベルとミノタウロスの間抜けな声
走った線はミノタウロスの胴体に度止まらず身体のあらゆるこ
ろに刻み込まれる

『~~~~~ツ!?』

悲鳴にならないような声をあげながらミノタウロスは肉塊となり
血しぶき、赤黒い液体を噴出した

大量の血のシャワーを浴びたベルは茫然と時を止める

「・・・大丈夫ですか?」

現れたのは少女であった

蒼色の軽装に包まれた細身の身体、そして——金眼金髪——

これだけでベルは助けてくれた人が何者か分かった

そして心臓が爆発し砕け散りそうになった

【ロキ・ファミア】に所属する第一級冒険者

ヒューマン、いや異種族間の女性の中でも最強と謳われるLV5

【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン

「あの・・・大丈夫ですか?」

そんなことは知らず声をかけるアイズ

だがベルはそれに答えられる状況ではない

「だ・・・」

「だ?」

疑問に思ったアイズを置いてベルは立ち上がり

次の瞬間

「だああああああああああああああああああああああああああ!!」

ベルは全速力でアイズから逃げるため上層へと走った

「・・・・・・・・」

その様子をアイズと一心は黙ってみるしかなかった

「黒の不死斬り」

オラリオで目覚めた一心の手元にあった刀
隻狼が持っていた赤の不死斬りに対をなす
墨で塗りつぶされたような黒鞘に蓮の花を象った鍔、刀身は漆黒の
瘴気を纏う両刃造りの刀

真の名は【開門】

竜胤の血と不死の者の肉体を供物として黄泉の門を開き、振るうも
のが望んだ死者を全盛期の姿、そして不死として現世に呼び戻す
だがその力もオラリオでは振るえない
竜胤の血など何処にも、葦名にもないのだから

「奥義・葦名十文字」

納刀の構えから高速の居合を繰り出す流派技
構えを維持すれば、機を伺って迎撃できる
形代を消費して、使用する
疾く斬ることを一意に極めた
葦名流の奥義である
儂の十文字は、牛人をも斬り殺す
剣聖・葦名一心は、そう嘯いた

五話 「ロキ・ファミリアは剣聖と出会う」

「行ってしまった・・・」

まさか助けてくれた人から逃げるとは思わなかったので啞然としてしまう

助けてくれた金髪の剣士もそのようで少しおろおろとしていた

「お主、大丈夫か？」

「・・・大丈夫です」

気になって声をかけてみたが声を聴く限り落ち込んでいる

というか今にも蹲りそうになっておる

「儂の仲間がすまぬな、あやつの代わりと言ってなんじゃが感謝するぞ、儂は「ヘステイア・ファミリア」の輩名一心じゃ。お主の名は？」

「ロキ・ファミリア」所属のアイズです」

「なんと、ロキ・ファミリアとな」

まさか都市最強と謳われるファミリアに出会えるとはな

しかもこの少女、先ほどのベルを助けたときに放った一閃

「こちらこそごめんなさい。私のファミリアがのせいでミノタウロスが・・・」

説明を聞くとアイズのファミリアの遠征帰りにミノタウロスの集団に出会い、戦闘したら怯えたミノタウロスが上層に逃げてきたらしい

「なるほどの、つまりお主らのせいで儂らは死にかけたと」

「ごめんなさい・・・」

そう言うときアイズは落ち込んでしまう、流石にこればかりは儂が悪いの

「冗談じゃよ、お主らのおかげでこうしてミノタウロスと戦うことも出来たし逆に感謝しておるわい」

「倒したんですか？」

「・・・まあそうじゃが」

食いつくように質問をしてきたアイズに少し驚きながらも答える

何かまずいことでもしてしまったのだろうか

「Lv・・・」

「ん？」

「一心さんのLv・・・いくつですか？」

ああ、なるほどな。もし儂がLv1だと答えるとLv2にカテゴライズされるミノタウロスを倒せるのは難しい、仮に本当の事を話しても信じてくれるかどうか・・・。疑われてロキ・ファミリアに因縁を付けられてしまえば拾ってくださったヘステイア神に申し訳が立たん。

ここは少し誤魔化しておくでしょう

「Lv1じゃよ、だがミノタウロスは既に瀕死だった。恐らくお主らの攻撃を受けて逃げてきたのじやろう、そのおかげでLv1の儂でも倒すことができたわい」

「そう・・・ですか」

なんとか誤魔化せたのかアイズはそれ以上なにも言ってこなかった

しばらく沈黙が続いた後、奥から一人の冒険者が走ってくる

「おい、アイズ!!始末できたか!!」

「うん、なんとか」

やってきたのは狼人、恐らくアイズと同じファミリアなのだろう

大声でアイズに声をかける

「チツ、やっと終わったか。ミノタウロスの野郎自分より強いからって逃げるのかよ、あいつらモンスターだろ」

「それはラウルの忠告を無視したベートさんが悪い」

「あー悪かったよ、これでいいだろ」

ベートと呼ばれた狼人は嫌そうな顔をし、頭を掻きながらアイズに謝罪する

「んで、そのジジイはなんだよ」

「この人は一心さん、私が助けた冒険者と一緒にいた人」

「お前が助けた冒険者ってあれか!!さっき逃げるように上に向かってたやつか!!」

くくつと笑いながらベートは腹を抱える

アイズはむすつと顔を膨らませる

「おいフィン!!ババア!!ガレスのジジイ!!やっぱりアイズの野郎、助けたやつに逃げられたらしいぜ!!」

ベートが向いた先を見ると先程ベートがやってきた道から大人数のパーティーがやってくる

「うくん、やっぱりそうだったんだ、遠くから見てもしやと思ったけど」

先頭にいたのは金色の長槍を持った小人族と

「ババアと呼ぶなベート、何度言ったらわかるんだ全く」

呆れ顔をしたベートを叱る、エルフの女性に

「まあ、あやつには何度言っても変わらんど。そんな簡単に治るはずもないしの」

大斧を携えたドワーフであった

お互いに軽く自己紹介を済ませた後、一心はアイズ、ガレス、フィン、リヴェリアと会話をしていた

ちなみにベートはぎやーぎやー騒ぎながら二人のアマゾネスに連れていかれた

「すまないね、僕らのファミリアのせいで君ともう一人の冒険者に迷惑をかけて」

そういいながらフィンは一心に頭を下げる

「なに、気にしなくてもよいわ。まあ流石に冒険者とやらになって初めてのダンジョンでいきなりこんな目に合うとは思わなかったがの」

「ん、一心よ。お主今日初めてダンジョンに潜ったのか?」

「おう、そうだが?」

一心の答えを聞いたガレスは少し笑いながら喋る

「いや、お主のような歳を食った者が冒険者になるのは珍しいを通り越して不思議での。ちと気になったのよ」

なるほどのと少し考える一心

「やはり儂のような歳から冒険者になるのは珍しいのか」

「まあ、お主の歳まで冒険者をやっている者は少なくての。殆どは「おめえみてえな雑魚か、こいつらくらいだよ」

ガレスの言葉をベートが遮って一心に話す

それを聞いた一心はピクリと眉を動かす

「ほう、そこまで言うか。ベートよ」

「雑魚が俺の名を呼ぶなよ。おめえのような歳食ったジジイがこんな所で何してやがる」

「やめるんだベート」

「ベート、その口を慎め。彼は今私たちと話してるのだ」

「フィンとババアは黙ってる」

注意をするフィンとリヴェリアを無視しベートは一心に話し続ける

「ジジイならジジイらしく田舎でこそこそと生きていけばいいのによ。その歳で冒険者だあ？舐めてんのかよ」

「舐めてはおらんぞ」

「その身体でなにが言えるんだよ、装備もろくにしてねえのによくギルドが許したもんだ。雑魚じゃないなら証明して・・・いてえ!？」

突然の頭に拳骨を喰らったベートは後ろを見る

そこにいたのは先程ベートを連れ去っていったアマゾネスの二人だった

「ベート！なんで団長の邪魔をするのよ!!」

「そうだよベート！大人しくしといてって言われてたじゃん!!そんなにあいずが誰かと話すのが嫌なの?」

「うっせえぞバカアマゾネス共!!!」

「・・・すまない、彼はあんな風にしか話せなくてね」

「大丈夫じゃよ」

勝手に喧嘩を始めるベートとアマゾネスたちを見ながらフィンと一心は苦笑する

「さて、君とこうやって話の場を設けたのは理由があるんだ」

「ほう、その理由はなんじや?」

「君、アイズから聞いた話だと瀕死になっていたミノタウロスを倒したんだってね」

「ああ、そうじやが?」

「それ、僕は嘘だと思っただけかどうか?」

一瞬一心の時が止まる

「理由は?」

「勘さ」

あまりにも簡単な理由だったがフィンには十分な理由だったようで、自分が倒したと確信しているかのように感じた一心は渋々答える
「・・・確かに儂がミノタウロスを倒した。して、それだけのために儂と話をしたのか?」

いいやとフィンは首を横に振る

「実はもう一つあってね・・・ロキ・ファミリアに入らないか」

その発言にガレスやリヴェリア達が驚く

「フィン、正気か?」

「ああ、至って正気さ」

リヴェリアの質問に一切顔を向けず答えるフィン

その目はジッと一心を見ていた

「その理由も聞かせてもらえないだろうか」

「さつきと同じさ。それと絶対君を仲間に入れるべきだと僕の親指が言っている」

どうだろうかとフィンは一心に手を差し伸べる

だがその手を一心は止める

「すまぬがその話は出来ぬということにしてはもらえないだろうか」

「・・・理由を聞いても?」

「儂は見知らぬ土地でヘステイア神に助けられ、ファミリアにも入れてもらった。ならば恩を返さねばならぬものよ」

「そうかい、それは悔しいよ」

フィンは手を戻す

「じやが、ヘステイア神に助けられなかったらお主のところに行つて

おったかもな」

「それこそ悔しいね、こんな優秀な冒険者を目の前にして仲間に加えないのは」

「ならばこれで話は終わりじゃな？そろそろ戻らんとベルが心配しているかもしれないから」

「時間を取らせて申し訳ない、今度は是非いい返事をしてくれるのを期待しているよ」

「まだ諦めておらんのか」

笑いながらフィンと握手を交わした一心は続いてアイズを見、話す「アイズよ、いずれベルを連れてくるからの。その時まで待つてはくれんか？」

「わかった」

「それとフィンよ、俺がミノタウロスを倒したという事。どうか他言無用で頼むぞ」

「考えておくよ」

こくと頷いたアイズと要望を聞いてくれたフィンを見て一心は【ロキ・ファミア】に別れを告げてダンジョンを上った

「団長、どうして出会ったばかりの冒険者を勧誘しようとしたんですか？」

「ティオネ、多分それは僕よりアイズに聞いたほうが早いと思うよ」

「そういうフィンはアイズに発言を促す」

「あの人・・・戦ってないから分からないけど、とても強い」

「えく!! そうなの!! じゃあさガレス、リヴェリア!! 二人はどう?」

ティオネと呼ばれた者とは別のアマゾネス——ティオナー——は二人に聞く

「概ね私も同意見だ」

「俺もじゃな、ティオナはどう思ったか？」

私? と質問を返されたティオナは悩む

「うーん、遠くから見ても普通の冒険者だと思っただけ?」

「俺もだ、ただの死にぞこないのジジイだろ」

「うわ、何かベートと同じ意見って嫌なんだけど」

「何だとしてめえ！」

「……………」

(ベート達に気づかれなほいほど隠すのが上手いのか？でも隠しているようには見えなかつた・・・それならば僕の勘違いか？)

テイオナとベートが喧嘩しているのをよそにフィンは悩み考え込んでいた

「あつははは!!つまり君はダンジョンに潜つた初日でミノタウロスに
出会い、単独で倒したのか!!」

そう笑うのはギルドの個室で一心という担当アドバイザーヘルタ
だ

ダンジョンから出た後、ギルドに向かうとそこでは彼女とベル、そ
して彼の担当であるエイナが待っていた

ベルからは

「一心さん大丈夫でしたか!？」

と心配され

エイナからは

「ベルと一緒に帰つてこないなんて何していたんですか!!」

と怒られ

ヘルタからはベルから話を聞いたのかニヤニヤしながら

「個室で詳しく話を聞こうか」

と誘われたため一心は話したのだが・・・

「少し笑いすぎではないか・・・？」

あまりの反応に流石に一心も困惑するしかなかった

「いやいや、誰だつてこんな反応をするさ。信じられるか？冒険者に

なつて一日も経つてないに等しい者がLv2にカテゴリーズされるミノタウロスを倒したつて」

確かに言われると信じられないとしか言えないが

「ベルから聞いたのではないのか？」

「彼からは二人がミノタウロスに襲われたとしか聞いてないよ。その後すぐにエイナに連れていかれたからね」

てつきりベルから聞いていたと思つていた一心は迂闊に話してしまつた事を後悔していた

「ならばわざわざ話さなくてもよかつたの・・・」

「何を言うんだい、私が君の担当になつたのはこういう面白い話を持つてきてくれると感じたからさ」

「お主、中々性格に難があるの・・・」

未だに笑つているヘルタに一心は呆れる

「私より神のほうが厄介だよ、こんな話を持つていたら確実に騒ぐだろうね」

「神がか？」

「そうさ、神は娯楽に飢えていてね。こういう話が大好物さ。飢えすぎて自分の眷属にちよつかいを出す神もいるくらいだ」

「そんな神で大丈夫なのかの・・・」

「ま、それは入つた奴の責任つてことさ」

へステイア神の様に慈悲深い神だけではないということか。

「そういえばミノタウロスの魔石はどうしたんだい？」

「持ち帰つて換金してもらつたが」

「そうかならばいい。しばらくは食い倒れにはならんだろう」

その答えを聞いて満足したのかよいしょとヘルタは腰を上げる

「今回はここまでにしておこう」

「よいのか？」

「ああ、今回の挑戦でどのモンスターをどれくらい倒したかを報告して貰えるだけで大丈夫さ。本当は君の出自についても色々聞きたかつたんだけど、ベルが君に紹介したい店があると言つていたのでね」

それならば確かに切り上げねばなど一心も思う。

「そうか、ならば儂も出るとしよう」

「次も面白い話を期待しているよ」

ヘルタからのそんな言葉に一心は少しだけ笑い返した。

一心が広場に戻るとすでにベルが待っていた
一心を探しているのか辺りを見回しており、見つけると近寄ってきた

「一心さん!!」

「すまんな、待たせてしまつて」

「いえいえ、僕も今来たところなので」

大丈夫ですよと話すベル

「それじゃあ一心さん、向きたい所があるのでいいですか?」

「おう、その話はヘルタから聞いておるぞ」

じゃあ行きましようかと歩みを進めたベルについていくことにした

「そういえばベルよ、少し良いか?」

「どうしました?」

目的地に行く途中で立ち止まりベルに話しかける一心

「お主、何故アイズから逃げたのじゃ?」

ダンジョン内での話を切り出した事にギクツとするベル

「す、すみません……」

「儂に謝つても……。後でお主一人で会つて謝つてこい」

「そ、そんなの無理ですよ!!」

「それはどうしてじゃ?」

「ど、どうして……」

一心に質問されたベルは顔を紅くしながら視線を逸らす
その行動に一心はある確信を持った

「お主もしや・・・惚れたな？」

再度一心の言葉にギクツとするベル

それを見た一心は笑う

「カカカツ、惚れて恥ずかしいから謝りにも行けないと!!中々面白いではないか!!」

「そんな大声で言わないで下さいよ!!」

大声で話す一心にベルは恥ずかしくなりながら注意する

「まあ、よいではないか。惚れる事は」

「でもエイナさんにこう言われたんです。『ロキ・ファミリアの幹部であるアイズさんにお近づきになるのは難しい』って。ただでさえファミリアが違うというのに」

確かに異なるファミリアの色恋沙汰はご法度に近いとヘルタは言っておったが

「別に不可能ではないのじやろう?」

「けれど難しいって・・・」

「なあに、お主が強くなればよい」

「僕が・・・ですか?」

情けない声を出すベルに一心はおうと答える

「強くなればいずれ、アイズの方から寄ってくるかもしれないぞ?」

その言葉にベルは少しだけ励まされた

「・・・そうですね!ありがとうございます、一心さん!!」

「なに儂から話し始めたことだから、何かあったのなら励ますつもりだったわい。さて、元気になったのなら行くとするか」

「はい!」

二人はまた道を進み始めた

「ここです」

「ほう、ここが儂を連れていきたいといった場所か」

連れてこられた場所は他の建物よりも二回りも大きい建物であつ

た

「ベルよ、ここは？」

「【豊穰の女主人】という名の酒場ですよ、こここの店員の方に今晚どうですかと誘われて・・・」

「ほう、酒場か」

酒場と聞いて嬉しそうな声を上げてしまう

酒が飲めるかもしれないとわかると居ても立っても居られなくなり一心は店へと進む

「失礼するぞー！」

「あつ、待ってください一心さん!!まだ心の準備が!!」

ベルの静止も遅く既に一心は扉を開け店内へと入っていった

「いらっしやいませ!!何名様でしょうか？」

出迎えてくれたのはヒューマンの少女であった

「2名じゃ」

「2名様ですか?ですが他に見当たりませんか・・・」

はて?と後ろを向くとベルが入り口の隙間から店内を伺っていた
「何をしておるベルよ。そこにいるとほかの客にも迷惑がかかるぞ」

一心の言葉にビクツとしたベルはやがて観念したのかゆっくりと中に入ってくる

「・・・やってきました」

「お待ちしておりますよベルさん。お客様2名はいりまーす!!」

ヒューマンの少女はベルにニコツと笑いかけると大声で店内に知らせる

そして進んでいく少女の後を一心とベルは続く

「ベルよ、そう縮こまってるとかえって目立つぞ」

びくびくしているベルに一心は声をかける

「でも僕こういう場所初めてで・・・」

「だとすれば尚更じゃ、お主も男ならしやんとせい」

バシツと一心に背中を叩かれたベルはなんとか立ち直ることができた

「では、こちらにどうぞ」

「おう、助かるわ」

「は、はい・・・」

案内されたのはカウンター席。4席が空いていたが真ん中に座るように促された。座ると目の前の女将と向き合う感じになった

「アンタ達がシルのお客さんかい？一人は可愛い、もう一人は中々良い顔をしてるじゃないか。しかもなんだい、あんたに至ってはあたしたちに悲鳴を上げさせる程の大食漢なんだそうじゃないか」

「!?」

女将から告げられた言葉にベルは驚く。

「ちよつとシルさんどういうことですか！僕がいつから大食漢になったんですか!?!」

「・・・えへへ」

「えへへじゃないですよ!」

「まあよいじゃないかベルよ、それよりもここには酒があるかの?」

「当り前さ、ここは酒場だからね、じゃんじゃん飲んでくれよ」

それを聞いた一心は酒と飯を、ベルはパスタを頼んだ

直ぐに醸造酒を出され、一心はぐいっと飲む。

「カーツ、ここの酒も中々美味しいの。」

葦名に負けずとも劣らずの酒の美味さに一心は喜びを感じる

「一心さんのいたところにも酒があったんですね」

「おう、葦名という国だな。源から流れる水から作られた酒はそれはもう美味くての」

「葦名っていうことはもしかして一心さんの・・・」

「そうじゃ、儂が興した国じゃよ」

一心が答えるとベルは目を輝かせる

「じゃ、じゃあ国を興すためにモンスターと戦ったりとか」

「いや、儂が戦ったのは人じゃよ」

聞くか?と問いかけるとベルは頷いたため一心は自身が国を興し

た物語——国盗り戦——の話語った

「そして僕は敵将田村を討ち取り、内府どもから国を獲ったのじゃ……
ベルよ、大丈夫か？」

途中からベルが何も反応していなかったので気になって見ると
ベルは驚きと興奮が混ざったような顔をしながらい心を覗いていた

「一心さんつてもしかして凄い方ですか……？」

「そうかの」

「だって一人で何十人も一気に相手したり、敵の一番上を一騎打ちで
倒したりつて普通の人出来ませんよ!!そんな事成し遂げるなんて英
雄じゃないですか!!」

「カカカツ、僕はただ取られた物を取り返したまでよ」

もしかしたら今目の前にいるのは物語で語られるような英雄なの
ではと興奮しているベルに対し一心は笑いながら酒を飲む

「ということは一心さんが国の主つてことですよね?こんな所において
大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃよ、……もう葦名も僕は死んだからの」

「え？」

「……」

(まずいの……この話、ヘスティア神にも話しておらんかったわい)
酒に酔っていたからかうっかり口を滑らせてしまった一心、自分の
失態に一気に酔いが覚め焦っていた

「それつてどういう……」

「おお一心!お主もここにおつたか!!」

まずいと思った時に横から声をかけてきた人がいた。

助かったと思いい横を見ると。

「まさかお主とまた会うとはな……ガレスよ」

ロキ・ファミアリア所属のガレスであった

「団員と酒を飲んでたんじゃがすぐに酔いつぶれる者が多くての、ど
うしたかと思つていたらお主がいたから声をかけたんじゃ。」

一心の隣に座りながらガレスは話す。

ちらとベルのほうを見ると先程案内してもらった店員と話しながら食べている。どうやら助かったらしい

「酒飲みならば付き合うぞ、たった今助けてもらったしの」

「どういうことだ？」

「こちらの話じゃ」

一心がそう答えるとならばとガレスはカウンターに樽を置く

「これは？」

「ドワーフの火酒じゃよ、お主もいける口ならどうよ」

「ほう、ならば試してみるとするか」

一心はコップに並々と注ぎそれを一気に飲み干す。すると口の中に旨味と辛さを感じ口元が緩む。葦名にて隻狼から貰った猿酒を思い出す味わいであった

「カーツ、辛い。猿酒に負けておらんわい」

「おお、飲むか。まだまだいけそうじゃがこれは儂の秘蔵での。それに勝手に飲むと主神に怒られる上、好き勝手に飲めんのよ」

「そうか、残念じゃが今はここの酒で我慢するかの」

「もし時間があれば儂らのファミリアに来るといい。その時にまた一緒に飲むとしよう」

「そうじゃな」

一心とガレスはお互いにジョッキをもち乾杯をした

「そういえば、ダンジョンではすまなかったの」

「ダンジョンというと？」

「ほれ、儂らのファミリアに入らないかという提案についてじゃよ」

しばらく飲みあっているとガレスがそんなことをいう

「大丈夫じゃよ、驚きはしたがの。あやつはいつもあんな風に勧誘したりしておるのか？」

「いや、あれが初めてじゃよ。普段は拠点でしか募集を受け付けてな

かったからこつちも驚いたぞ」

「成程の、そういわれると嬉しくはなるが今のところはファミリアを変えつつもりもないしの」

「そうか、それは残念じゃ」

ガレスはそう言いながら酒を飲む。お主にもそういわれるとはな追加の酒を頼もうとするど何やら遠くで宴会をしている席が騒がしくなっていた

「あそこの席、何やら騒がしくないか？」

「む？あそこは農らのファミリアの席じゃが」

確かによく見るとアイズやフィンが見え、他の団員達と仲良く飲んでた

だが、一人だけ明らかに冒険者といえない格好をした女性がいた

「ガレスよ、あの女性は何者じゃ？冒険者のようには見えんが」

「ん？あれは農らの主神じゃよ」

ガレスが主神と呼ぶ緋色の髪をした女性は自身の眷族よりも酒を飲み、眷族にダル絡みしているようだ

「ほう、主神も宴に参加するのか」

「農らの主神は酒と宴が大好きでの、大きな山を越えた時にはああして皆で集まって騒いでおるのじゃ」

「中々良い主神ではないか」

そんな話を一心とガレスが話しているとロキ・ファミリアの席から大声を発する者がいた

「そうだアイズ!!お前のあの話を聞かせてやれよ!!」

何だと一心が声の主を見るとミノタウロス討伐後にダンジョンで噛みついてきた狼人、ベートであった

「あの話？」

「あれだって、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス!最後の一匹、お前が5階層で始末しただろ!?!そんで、あん時いたトマト野郎の!」

アイズが聞き返すとベートは答えた。

(5階層にミノタウロス・・・、ベルを助けた時の事か)

恐らくは自分達の出来事だろうと気になり、少しだけ耳を傾ける一

心

その隣では聞こえたのだろうかビクツと反応するベル。

内容はやはりと言うべきかあまりにも酷いものであった

まとめると深層まで『遠征』していた彼ら「ロキ・ファミリア」は
帰路の際に遭遇したミノタウロスの群れを仕留め損ね

何とかそれを追いかけていき、最後の一匹を一心達がいた5階層へと追い詰め

アイズがとどめを刺した

その時そこにいたのは

「それでよ、いたんだよ。いかにも駆け出しっていうようなひよろく
せえ冒険者が!!」

ベルであった

「抱腹もんだったぜ。兎みたいに追い込まれちまってよお！可哀そう
なくらい震え上がっちゃって、顔を引きつらせてやんの!!」

「.....」

「ふむう？それで、その冒険者どうしたん？助かったん？」

「アイズが間一髪ってところでミノを細切れにしてやったんだよ、
なっ？」

「.....」

ベートの問いにアイズは少し眉をひそめる

「それにだぜ？そのトマト野郎、一緒に潜ってたジジイを置いて叫び
ながら上に行っちゃって.....。うちのお姫様、助けた後に逃げられ
てやんの!!」

どつと笑い声に包まれる「ロキ・ファミリア」の人達。

「全くベートめ、面倒なことを.....。すまぬな、一心。今ベートを
一心？」

「すまないなガレス、このままだとお主から貰った酒がまずくなるか
らの。：少しだけ待っててくれ」

他人の出来事を、ましてやその人を辱める様な話酒の肴にしながら
話す彼を当然一心は許せなかった。

しかも今回は件の本人が隣にいる。純粹無垢な彼にとって憧れの

人がいる場でこのような話をされてしまうと最悪立ち直れなくなってしまう。

そんな事態にはなってはならぬと、ベートの言動に呆れながら謝罪し注意をしてこようとしたガレスよりも速く、一心はガレスに謝罪をしながら席を立ち上がり【ロキ・ファミリア】の席へと向かった。

「よおベートよ、ダンジョン以来じやのう」

一心は賑わっていた【ロキ・ファミリア】の席に向かうと、ベートに声をかける

「あ？なんだよジジイ」

「なに、こちらから面白そうな話が聞こえてきての。気になったから来てみたのじゃよ」

「話だど？」

一心の言葉にベートは酒の入ったジョッキを持ちながら一心に聞き返す

「お主が先ほどまで喋っていた話じゃよ」

「あのトマト野郎の話か、それがどうかしたか？」

「儂の仲間であるベルを侮辱した事を謝罪してほしくての」

その言葉にベートはあからさまに嫌そうな顔をする

「なんで俺が謝らないといけないんだ？俺は本当の事を言ったまでだぜっ」

「ああ、確かにお主は真の事しか話しておらぬ。そこについては何も言えんよ」

「だろ？だつたらなおの事謝らなくていいだろ」

呆れた顔をするベートに対し一心は言葉を続ける

「だがの、自分たちの話ならまだしも他人の失態の話を酒の肴にするのは許せんよ。【ロキ・ファミリア】はこんな者が上に立っているとフィンやリヴェリアも苦勞するの」

「……今てめえなんて言った」

一心の挑発にベートは噛みつく

席から立ち上がり一心を睨む

「何、他人の失態を着にするような者がこの都市で最高峰のファミリアの幹部とは残念だと言っただけじゃよ」

「てめえ……!!」

「そこまでだ、ベート」

怒りのあまり一心の胸ぐらを掴もうとしたベートをフィンが止める

「ああ!?なんでだよ!!」

「確かに他人の失態を酒の肴にするのは良くなかった。それにそれを止めることをしなかった僕達にも非がある。」

「だからってあのジジイの肩を持つのかよ!こんな雑魚に!!」

「ベート、彼は僕が認めた冒険者だ。それでもそんなことをいうのかい?」

ベートの発言にもフィンは優しく諭す

だがダンジョンで一心をフィンが勧誘した事にイラついている

ベートは、納得がいかずまた一心を睨む

「よう、ジジイ。フィンが認めたらしいけどよ、俺は納得がいかねえんだ。たかがLv1の雑魚と俺らが同じ実力を持つているってことをな」

「ならばどうすればよい」

「簡単さ、今実力を見せてくれればいい。フィンに認められたジジイなら簡単だろ?それとも怖気づいて逃げるか?」

「……」

初めて会った時から中々性格に難がある者とは思っていたがここまでとは思っていなかった一心は頭を悩ませていた

(まずいの…、下手に事を荒げたりしてしまうとベルとアイズの機会を失ってしまう…)

どうしたものかと助けを求めたくちらりとフィンを見るも、フィンも一心の実力に興味があるのか、やっても構わないとジエスチャーで

答えられる。フィンの近くににいるアイズやリヴェリアも同じようで、
「ロキ・ファミリア」の主神であるロキも面白そうにこちらを見ていた。

「そーいやアンタの名前聞いてなかったな、名前何て言うん？」

「僕は葦名一心と申す。そしてロキ神よ申し訳ない、せつかくの宴会の邪魔をってしまった」

「大丈夫や、うちの団員が迷惑をかけたのは事実やしな。逆にこっちが申し訳ないわ」

ヘラヘラと笑いながら話すロキを見て一心は少しだけ安堵する。
どうやら「ロキ・ファミリア」の主神の怒りは買ってなかったようだ
「てことはあんたがフィンが言つとった冒険者やな。初めてフィンが
勧誘をしたのにそれを断つたって聞いたときはおもしろかったで。」

どうやらフィンが勧誘した時の話が面白かったようで、ロキはケラ
ケラと笑い酒を飲みながら話す

「それでな、滅茶苦茶気になったんや。フィンが自ら勧誘するほどの
冒険者がどんなもんかってな。」

そう言うのとロキは目にもとまらぬ速さで一心の近くに行き、

「どれどれ・・・」

一心をじーつと見ていた

「ロキ神・・・？」

これには流石の一心も困惑の声を上げざるを得ない

「んゝ決まりや!!あんた、今度うちのファミリアに来てくれんか？」

ロキのゝ一心の肩を叩きながら発言したゝ言葉に一心や団員たちが驚く

「ロキ、もしかして勧誘するの!?!」

フィンの近くにいたティオネが驚きの声をあげる

「ちやうちやう、実力見るんやったらちゃんとしたところでやった方がええやろ?ならうちのファミリアに来てもらってやるのが一番ええと思つてな。どやフィン、いい考えやろ」

「確かにそれも良いね。ここで見せてもらってもベート辺りが納得しなさそうだし『ああ!?!』後は本人が良いと言えばいいけれど……どう

かな?」

「神の頼みとあれば断れんな。儂は構わん」

とんとん拍子で話が決まっていきこちらとしても案外悪くはない提案だった一心は承諾する

都市最強と謳われるファミリアとのお手合わせ。それが出来るなど願っていてもいないことだからだ

「よっしゃー!ほな明日か明後日の昼間に来てもらえれば大丈夫なようにしとくわ」

「感謝するロキ神」

「ええで。ほな楽しみに待つとるで〜」

ロキのお陰もあって特に大事に至らなかつた事に感謝しながら一心は自分の席へと戻っていった

「それで、ロキ。彼はどうだった?」

「ん?なんのことや」

一心が戻るのを見てからフィンはロキに声をかけた

「彼を近くから見たんだらう?神として何か言ってもらってもいいんじゃないかと思つてね」

「んまあ、簡単に言うとかヤバイ奴やな、近くで見とつたけど恐ろしかったわ」

ヒィーと体勢を少し崩しながらしゃべるロキ

「そんなにかい?」

「ほんまや、フィンが勧誘したつても分からなくはない。しかもあれ・・・英雄やわ」

「…英雄?」

ロキの言葉にぴくりと親指がうずいたフィンは聞き返す

「せやで。多分あいつ…小さくながらも英雄と呼ばれるくらいの偉業を成し遂げるわ。」

「偉業か…」

普段のロキなら冗談で聞いていたが少しずつ真面目に話していく

ロキとにフィンも真剣になっていく

「ま、それも明日か明後日に分かるかもしれないし、その時まで楽しみにしとくか。今は楽しむ時間や」

「そうだね」

素晴らしいながらロキとフィンの二人は再び酒を交わした